

とこなめ陶の森資料館企画展

瀧田家の廻船文書展

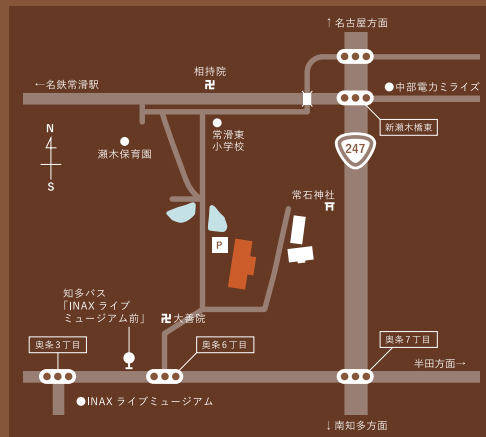
たき たけ かい せん もん じょ てん

Part 参

講演会

瀧田家と西国の商人

講師：曲田浩和氏（日本福祉大学） 会場：資料館2階 講座室
日時：5月21日（土） 定員：30名（予約不要・先着順）
14:00～15:30 参加費：無料



とこなめ陶の森 資料館

TEL: 0569-34-5290 常滑市瀬木町4丁目203番地 www.tokoname-toumori.jp

瀧田家について

常滑市の中心部にあたる北条に居住した瀧田金左衛門家（以下、瀧田家）の始まりは定かではありません。初代金左衛門は元文5年（1740）没とされており、遅くとも18世紀初頭には独立した家として営まれていたと考えられています。

瀧田家が大きく成長したのは四代金左衛門（安政3年[1856]没）、五代金左衛門（明治24年[1891]没）の頃です。この四代金左衛門は渡辺与惣左衛門

家からの養子といわれ、廻船業を始めた時代でもあります。四代・五代にわたって船主として船を増やし、それとともに常滑焼の窯の権利を保有するなど経営を発展させてきました。

今回の企画展では、瀧田家の所持する船の航海と取引のうち、西日本地域を対象にした文書を紹介します。

西日本への航海

瀧田家の船は、1年間に東西4～5往復の航海をしました。伊勢湾と関東をつなぐ航海が基本でしたが、西日本にも航海していたことがわかっています。瀧田家の船の西日本での寄港地は、兵庫や大阪が中心でした。これらの港は米・魚肥の集散地でした。魚肥とは鰯や鰺を原料とした干鰯、鯡粕などの肥料のことです。瀧田家の船は、西日本では宇和（愛媛県）・佐伯（大分県）産の干鰯を扱い、幕末になると北海道（蝦夷地）産の鰯粕や干鰯を兵庫・大阪で取引するようになりました。瀧田家の船は江戸（東京）には米を、伊勢湾には魚肥を運びました。

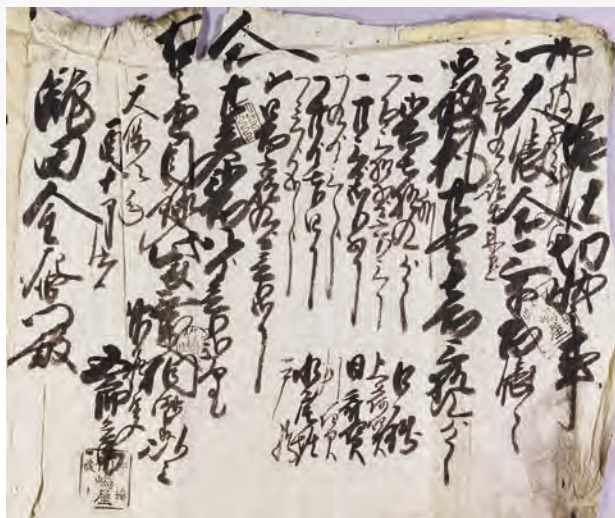
瀧田家の船は、瀬戸内海中央部辺りまでしか行かず、日本海に出ることはほとんどありません。瀬戸内海の諸港では塩・砂糖・鉄・畳表・蕨など

を積みました。左下の図は赤穂（兵庫県）の塩間屋から購入した塩の仕切です。この仕切は瀧田家に残るもっとも古い船の史料です。紀州では傘や箒の原料である棕櫚皮を扱いました。

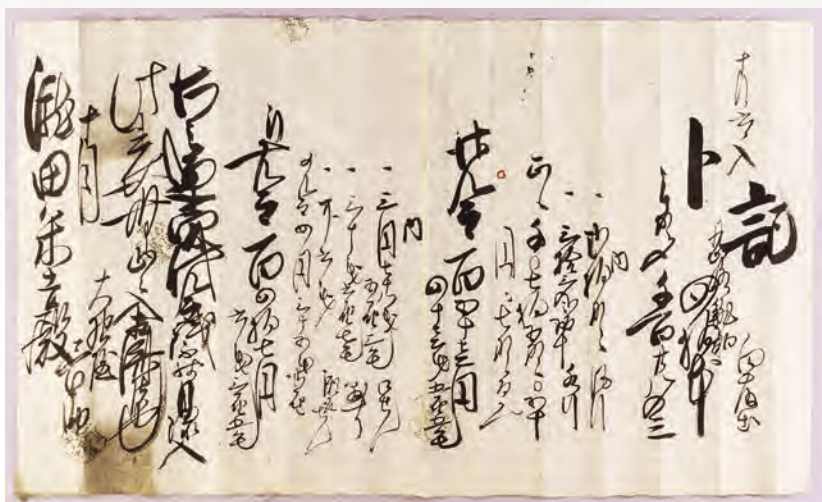
瀧田家の船は兵庫・大阪で酒造道具を積み、醸造業のさかんな知多半島に運びました。地元の産業とも結びついています。

船の往来がさかんな瀬戸内海では、さまざまな船道具が販売されました。兵庫や尾道（広島県）では帆や碇などの船道具を調達しました。また、船の修理も行っています。

本展示では、帳簿、仕切などの取引証文、書状などを通して、瀧田家の廻船活動を紹介します。とくに書状は、船と商人のやりとりのほか、社会の様子も記され、リアルな状況がうかがえます。



竹嶋屋から購入した塩の仕切（1837年）



北海道産鯡粕の仕切（1878年）